

昭和五十四年四月二十二日 郷土史資料

第九十四回

史跡めぐり資料

源 頼朝の墓

鎌倉八幡宮

北条政子の墓

越谷市郷土研究会  
山崎善司

第九十四回 史跡めぐり案内

一、日時 四月二十二日 第四日曜日

一、集合 越谷駅前 午前八時 〇分―八時二十五分発 準急 浅草行

乗替 北千住―上野―東京(横須賀線)

一、行先 鎌倉駅(横須賀線) 下車

段葛―執権北条館跡―大蔵幕府跡―法華寺跡―

源頼朝の墓―三浦一族の墓―大江広元の墓―畠山重忠館跡

鶴岡八幡宮―宝物館―白旛神社―鎌倉国宝館

昼食(源氏池休屋)

源氏池―平家池―鉄の井―窟屋不堂―

寿福寺―政子・実朝の墓―銭洗弁天―小町通り散策

一、帰路 鎌倉駅乗車―東京乗替―越谷駅下車 下車

一、会費 貳千五百円也、但し、昼食は各自持参の事

以上

しづやしづ 賤のをだまき くり返し

昔を今に なすよしもがな

吉野山 嶺の白雪 踏みわけて

入にし人の 跡ぞ恋ひしき

鎌倉の名の起り

鎌倉五山第五位の淨妙寺境内に鎌足稻荷といふ小祠がある。大化二年(六四六)中臣鎌足(藤原鎌足)が常陸国の鹿島神宮に参詣の折に相模国の由比郷に泊つた。其の時、鎌足の夢枕に一人の白髪の翁があらわれ、「お前に靈驗あらたかな剣を授けよう。此れを地に埋めれば天下の良く治まる事疑いない」と言つて消え去つた。夢からさめると、枕元に鎌があつた。其処で鎌足が其れを埋める地を探していると、一匹の白狼が現われて淨妙寺の裏山に案内したので、其処に埋めた。其の場所が鎌足稻荷の傍だといふ。

鎌足が其処に堂を建てて神楽を奉納した所神楽を舞つた男が神懸りして、「靈剣を埋めた此の鎌倉の地は、五穀豊穰、人民安楽の平和な里になるであらう」と神託を告げた。都に歸つた鎌足が、此の事を時の考徳天皇に言上すると、以後、其の地を「鎌倉」と唱えよとの仰せがあつた。鎌倉の地名は此処から起つたと云う事である。然し鎌倉のもつと古い記録は、「古事記」景行天皇の条に、倭建命の御子、足鏡別王が鎌倉の地で別の祖となつたという、記事がある。となると、鎌足の時代より揺か前に鎌倉と云う地名があつたわけで、結局の所、此の地名の起源に付いては、今だにはつきりした事は判つていない。確かな文献の上に鎌倉が登場するの

は、正倉院文書の中の「相模国封土戸租交易帳」である。此れは奈良時代の天平七年(七三五)十一月に相模国司が中央に報告した計算帳で「鎌倉郡鎌倉郷三十戸、田一百三十五歩」と記されている。

源頼朝の幕府創設

平安時代に入つて、前九年の役で東国に遠征した源頼義・義家の父子は康平六年(一〇六三)に山城国石清水八幡宮を鎌倉の由比郡鶴岡に勧請して社殿を建立した。今の元八幡の地である。

此の頃から源氏と鎌倉の関係が深まり、義家から四代目の義朝は館を設けて居住している。寿福寺の境内がその館跡と伝えられ、裏山の源氏山の名も其れに因むものと云われている。然し鎌倉を一躍、歴史の檢舞台に押し上げたのは源頼朝である。平治の乱で敗れた頼朝は伊豆の姪ヶ小島に流されたが、治承四年(一一八〇)に以仁王の令旨を受けて挙兵し、石橋山の合戦では大敗したものの、忽ち捲土重来して鎌倉に入つた。此の時由比郷の鶴岡八幡を現在の地に遷している。文治元年(一一八五)平家を壇ノ浦に滅亡させた頼朝は建久三年(一一九二)征夷大將軍に任ぜられて鎌倉幕府を開いた。明治維新まで六百七十余年に及ぶ武家政治は之の時に始まつたのである。

然し其処に至る迄の道には同族の太監義仲を討ち、弟の義経を追うなど、骨肉相剋の悲劇を繰返している。保元平治の乱でも源氏は親兄弟が争つたし、やがて迎える源氏滅亡もやはり骨肉の争いがからむのである。骨肉相剋は源氏の血統といつてもいい。

頼朝の死後、長子頼家が二代將軍となるが、母政子の実家北条氏の圧力に抵抗して、妻の実家比企一族と語り北条氏討滅を計る。然し此れわ事前には洩れて比企一族は全滅し、頼家も伊豆修善寺に幽閉された後、建保三年（一二一五）北条氏の手で懸り暗殺された。

続いて頼家の弟実朝が三代將軍となつたが、承久元年（一二一九）正月、鶴岡八幡宮拝賀の帰路、頼家の子公暁に襲われて横死した。此の事件の背後には北条氏の謀略があつたとも云われる。ともあれ、此処に源氏は三代にして絶えたのである。

子供運に恵まれぬ政子だが、協力者の弟義時がいた、政子は義時と相談して、わずかに頼朝の血を引く九条頼経を京都より迎えて、四代將軍にすえた。頼経はわずかに二才の幼児に過ぎないので、政子が政治の実権を握つた。

此処に弟義時は姉政子を助けて執権職となり執権政治態制が出来あがり、嫡男泰時も又父義時に劣らぬ名政治家であつた。

嘉禄元年（一二二五）七月、政子は、甥泰時に後事を託して永眠した、享年六十九才其の墓は愛児実朝の墓と並んで、寿福寺に残る。

執権職は初代 時政、二代 義時となる

### 宝戒寺

北条執権屋敷跡と伝えられ、入口に「北条九代屋敷」と刻まれた大きな石碑がある。天台宗の寺であるが、萩寺と呼ばれ親しまれている。建武二年（一三三五）建立と寺伝にある。後醍醐天皇が北条一族の怨霊を鎮める為足利尊氏に命じて其の館跡に建立させた寺である。本尊地藏菩薩を安置する。貞治四年（一三六五）三条法印憲円作。尚伝義朝の墓がある。元勝長寿院跡にあつたものを移したと云い、変形の五輪塔である。

鎌倉地藏巡礼一番札所

地藏菩薩座像 開山慈鎮木像

北条高時像 歡喜天像

源義朝の墓 梵天 帝釈天

萩の寺として名高い、白萩

大銀杏と榎の木 南北朝期よりの木

### 大蔵幕府跡

清泉女子学園のある一帯が頼朝の鎌倉幕府跡である。幕府は後北条執権時代となり宇郡宮辻子に、更に若宮大路に移されたので、頼朝時代のもものは大蔵幕府跡と呼ばれている。

幕府の三方に門が設けられ、東御門・西御門南御門と云われ、今は西御門のみが地名として

残されている。

### 法華堂跡

頼朝の生前の持仏堂である。以前は八幡宮にある白旗神社の旧地であった。

建保元年（一一二一—三）和田の合戦には実朝が此処に難を逃れ、宝治元年（一二四七）の三浦の合戦には安達景盛と北条に攻められ法華堂に追つめられ、三百余名が此処で自刃した。明治の神仏分離令で廃止されたが、其の後に白旗宮が建てられた。

### 源頼朝の墓

大倉山の中腹にある層塔の石塔である。建久十年（一一九九）没、始め勝長寿院にあつたものを、安永年間（一七七二—八）鶴岡荘殿院の住職が此処に移したと云い、薩摩藩主島津重豪が五輪塔だつたものを層塔に改築した。頼朝の死は、建久十年（一一九九）一月十三日没となつてゐるが、其の死因に付いては、吾妻鏡には將軍の死と云う大事件にもかかわらず此の部分がかけてゐる。保暦間記によると、頼朝の死は怨霊のたたりだと云う。橋供養の帰り、頼朝の滅した身内の義経や叔父新宮行家等の亡霊が現われ、頼朝は

かまわず尚も馬を進め、稲村ヶ崎に差懸ると、今度は海上に幼くして壇ノ浦に沈んだ安徳天皇の亡霊が現われ、「汝を予てより狙つていたのだが、ようよお見付けたぞ、我こそは西海に沈んだ安徳天皇である」と云つて掻き消えた。其の直後から頼朝は病いにかかり、ついに死んだという。

又、真俗雑談には、頼朝に取つては甚だ不名誉な死因が記されている。或夜、安達盛長が頼朝の館を警護していると、闇の中に白いものが動いた。良く見ると被衣をかぶつた男で、今しも女房の部屋に忍び込もうとしてゐる。其処で盛長は、「おのれ曲者！」と叫んで斬り倒した。処が被衣をはいで見ると、其の男は頼朝だつた。妻政子の目を掠めて女房のもとへ忍ぶ処此の災難に逢たのであつた。仰天する盛長に、さすが恥を知る頼朝は「自分の死は急病と云う事にせよ」と言い残し息を引取つたと云う。何れにせよ、頼朝の死因は未だに謎に包まれた尽である。

### 三浦一族の墓

頼朝の墓の東方の山裾を廻り階段を登ると中腹にある「やぐら」がそれである。

宝治元年（一二四七）六月五日、三浦泰村は北条時頼に対し、かねてより三浦一族は武備を整え、謀叛の心ありとの噂があつた事に付き和解が付き、自分にはいささかも異心の無き事を

陳弁し、時頼も之を了解した。所が之を聞いた安達景盛は、此の三浦一族をのさばらして置いては幕府内に禍根を残すとして、一族郎党を卒いて突如として三浦館を襲撃した。之に對し三浦一族も必死に防戦した。三浦に心を寄せる者供も応援に馳けつけ、騒ぎが大きくなり、時頼はほつて置けずと、北条時定に命じ安達の応援にくり出した。三浦一族は法華堂に追いつめられ、五百余人もろともに討れ自刃して滅びさつたのである。

### 大江 広元 の墓

三浦一族の墓より尚石段を登りつめると、立派なやぐらがある、之が大江広元の墓である。広元は鎌倉幕府の公文書別当として陰然たる勢力を持ち、始め朝廷の小外記であつたが、幕府創設と同時に頼朝に招かれ能吏としての才腕を發揮した。鎌倉幕府の地方行政の二本柱とも云うべき、守護、地頭の設置を献策したのも広元である。

幕府創建の重臣達が政争の中に捲き込まれて或いは亡び或いは没落して行く中で、文官である広元は、其れに捲込まれる事無く、新たな実力者北条と上手に手を結んで、嘉祿元年（一二二五）七十七歳の天寿を全うした。

戦国時代、山陽山陰に威を奮つた毛利氏は之の広元の四男季光の子孫である。

### 畠山重忠館跡

八幡宮表参道より流鏑馬馬場を過ぎ境内の外右手の一区画が畠山重忠館跡である。鎌倉幕府創立期からの功臣にて幕閣の重臣として栄えた。頼朝の信任重く、遺托に依り頼家の補佐に当る。

重忠は桓武平氏秩父氏族・畠山莊司重能の子母は三浦義明の女。子は六郎重保。武蔵国男衾郡畠山莊に住す。幼名は氏王丸。通称は莊司次郎。長寛二年（一一六四）一〇五（四十二歳）治承四年頼朝挙兵の時父が大番役で在京の爲、大庭景親に与して石橋山の合戦には頼朝の軍と戦つたが、其の後土肥実平・千葉常胤らによつて頼朝に帰属した。

寿永三年木曾義仲追討には義経の西上軍に従つて宇治川に功をたて、次いで平氏の追討には頼朝の麾下に入つたが、去つて義経に属し、大功をたてた。文治三年（一一八七）義経の件にて所領没収されたが、千葉胤正の救援によりて許されて本領を安堵された。更に梶原景時のぞんげんにより難にあつたが罪を免かれ、文治五年奥州征伐には先鋒として勇戦し、其の功によつて葛岡郡を与えられた。頼家の補佐役であつたので、北条氏の縁者平賀朝雅と争つた爲重保は謀殺され、父重忠は武蔵二俣にて敗死した。

鶴岡八幡宮

本宮 由比ヶ浜から真直ぐに北東に延びて鎌倉を二分する若宮大路の突当りの大臣山山腹にある。

康平六年（一〇六三）源頼義が、前九年の役より凱旋したのを記し、山城国の石清水八幡宮の分霊を鎌倉由比郡鶴岡（材木座元八幡）の地に勧請した。治承四年（一一九〇）頼朝が幕府開設と同時に此の地に移して鎌倉若宮と称し、源氏の氏神とした。今の舞殿の地である。ところが、建久二年（一一九一）三月に火災で焼失したのを期に、背後の山腹に新たな社殿を造り、十一月十二日完成、鶴岡八幡宮と称した。

祭神 応神天皇・神宮功后・比売神

以来源氏の守護神として北条氏始め後世の武将から武神として信仰され、武家為政者の保護を受け、多くの戦乱にも、天災にも、社殿の造営がなされて来た。

現在の社殿は、文政年間（一八一八〜二九）の更建だが、建久二年頼朝の建てた頃の伝統をほぼ忠実に受継いでいる。

舞殿 静御前が義経を慕って舞った所とい  
うが、事実は、若宮の回廊が其の舞台であつたと云う。然し、毎年四月には「静ノ舞」が此の舞台で再現、奉納される。

若宮 下宮とも云う、建物は、室町時代末期の様式を現代に伝える、本殿・幣殿・拝殿を持つ権現造り。仁徳天皇・履仲天皇・仲媛命・磐之媛命を祀る。 県重要文化財

隠れ銀杏 本宮石段の途中左側にあり、樹齢七百年を越す。承久元年（一二一九）源頼朝の子公暁が此の樹の影に隠れていて、叔父の將軍実朝を暗殺したと云う。時に実朝二十八歳。公暁十九歳であつた。

白旗神社 若宮の東奥にある。源頼朝・実朝の霊を祀る。元は、大倉山のふもと（今の法華堂跡）にあつたものを移したと云う。頼朝の木像が安置されていたが、現在は東京国立博物館の所蔵となつてゐる。

鎌倉国宝館 白旗神社から南に木立の間を行くと其処に鎌倉国宝館がある。昭和三年開館。鎌倉各社寺の貴重なる文化財を保管展示している。毎月一回陳列替えを行つてゐる。正月には国宝・重文ばかりを展示公開する。

源平池 三ノ島居を潜ると、すぐ前左が平家池。右が源氏池の云う。寿永元年（一一八二）四月、弦巻田と呼ばれる社前の水田三町余を池に改めた。中央太鼓橋（出世橋）を境に、白蓮の華と三つの島の右側を源氏ノ池、赤い蓮の華と四つの島の左側を平家ノ池と云う。島の数の三は「産」四は「死」を意味すると云う。



陳弁し、時頼も之を了解した。所が之を聞いた安達景盛は、此の三浦一族をのさばらして置いては幕府内に禍根を残すとして、一族郎党を卒いて突如として三浦館を襲撃した。之に對し三浦一族も必死に防戦した。三浦に心を寄せる者供も応援に馳けつけ、騒ぎが大きくなり、時頼はほつて置けずと、北条時定に命じ安達の応援にくり出した。三浦一族は法華堂に追いつめられ、五百余人もろともに討れ自刃して滅びさつたのである。

### 大江 広元の墓

三浦一族の墓より尚石段を登りつめると、立派なやぐらがある、之が大江広元の墓である。広元は鎌倉幕府の公文書別当として陰然たる勢力を持ち、始め朝廷の小外記であつたが、幕府創設と同時に頼朝に招かれ能吏としての才腕を発揮した。鎌倉幕府の地方行政の二本柱とも云うべき、守護・地頭の設置を献策したのも広元である。

幕府創建の重臣達が政争の中に捲き込まれて或いは亡び或いは没落して行く中で、文官である広元は、其れに捲込まれる事無く、新たな実力者北条と上手に手を結んで、嘉祿元年（一二二五）七十七歳の天寿を全うした。

戦国時代、山陽山陰に威を奮つた毛利氏は之の広元の四男季光の子孫である。

### 島山重忠館跡

八幡宮表参道より流鏑馬馬場を過ぎ境内の右手の一区画が島山重忠館跡である。鎌倉幕府創立期からの功臣にて幕閣の重臣として栄えた。頼朝の信任重く、遺托に依り頼家の補佐に當る。

重忠は桓武平氏秩父氏族・島山荘司重能の子母は三浦義明の女。子は六郎重保。武蔵国男衾郡島山荘に住す。幼名は氏王丸。通称は荘司次郎。長寛二年（一一六四）一〇五（四十二歳）治承四年頼朝挙兵の時は父が大番役で在京の為、大庭景親に与して石橋山の合戦には頼朝の軍と戦つたが、其の後土肥実平・千葉常胤らによつて頼朝に帰属した。

寿永三年木曾義仲追討には義経の西上軍に従つて宇治川に功をたて、次いで平氏の追討には頼朝の麾下に入ったが、去つて義経に属し、大功をたてた。文治三年（一一八七）義経の件にて所領没収されたが、千葉胤正の教解によりて許されて本領を安堵された。更に梶原景時のぞんげんにより難にあつたが罪を免かれ、文治五年奥州征伐には先鋒として勇戦し、其の功によつて葛岡郡を与えられた。頼家の補佐役であつたので、北条氏の縁者平賀朝雅と争つた為重保は謀殺され、父重忠は武蔵二俣にて敗死した。

鶴岡八幡宮

本宮 由比ヶ浜から真直ぐに北東に延びて鎌倉を二分する若宮大路の突当りの大臣山山腹にある。

康平六年（一〇六三）源頼義が、前九年の役より凱旋したのを記し、山城国の石清水八幡宮の分霊を鎌倉由比郡鶴岡（材木座元八幡）の地に勧請した。治承四年（一一九〇）頼朝が幕府開設と同時に此の地に移して鎌倉若宮と称し、源氏の氏神とした。今の舞殿の地である。ところが、建久二年（一一九一）三月に火災で焼失したのを期に、背後の山腹に新たな社殿を造り、十一月十二日完成、鶴岡八幡宮と称した。

祭神 応神天皇・神宮功后・比売神

以来源氏の守護神として北条氏始め後世の武将から武神として信仰され、武家為政者の保護を受け、多くの戦乱にも、天災にも、社殿の造営がなされて来た。

現在の社殿は、文政年間（一八一八〜二九）の更建だが、建久二年頼朝の建てた頃の伝統をほぼ忠実に受継いでいる。

舞殿 静御前が義経を慕って舞った所とい  
うが、事実は、若宮の回廊が其の舞台であつたと云う。然し、毎年四月には「静ノ舞」が此の舞台で再現、奉納される。

若宮 下宮とも云う、建物は、室町時代末期の様式を現代に伝える、本殿・幣殿・拝殿を持つ権現造り。仁徳天皇・履仲天皇・仲媛命・磐之媛命を祀る。 県重要文化財

隠れ銀杏 本宮石段の途中左側にあり、樹齢七百年を越す。承久元年（一二一九）源頼朝の子公暁が此の樹の影に隠れていて、叔父の將軍実朝を暗殺したと云う。時に実朝二十八歳。公暁十九歳であつた。

白旗神社 若宮の東奥にある。源頼朝・実朝の霊を祀る。元は、大倉山のふもと（今の法華堂跡）にあつたものを移したと云う。頼朝の木像が安置されていたが、現在は東京国立博物館の所蔵となつてゐる。

鎌倉国宝館 白旗神社から南に木立の間を行くと其処に鎌倉国宝館がある。昭和三年開館。鎌倉各社寺の貴重なる文化財を保管展示している。毎月一回陳列替えを行つてゐる。正月には国宝・重文ばかりを展示公開する。

源平池 三ノ島居を潜ると、すぐ前左が平家池。右が源氏池の云う。寿永元年（一一八二）四月、弦巻田と呼ばれる社前の水田三町余を池に改めた。中央太鼓橋（出世橋）を境に、白蓮の華と三つの島の右側を源氏ノ池、赤い蓮の華と四つの島の左側を平家ノ池と云う。島の数の三は「産」四は「死」を意味すると云う。

段 葛 若宮大路の一ノ鳥居より三ノ鳥居迄の間に路の中央に石積にして、一段高く参道を造つたものである。現在は二ノ鳥居より三ノ鳥居迄となつてゐる。

寿永元年（一一八二）頼朝の妻政子の安産祈願の為、頼朝自ら指揮を取り、北条時政・畠山重忠などの武将が置石を運んで造つたと云う。

寺に桜の花とツツジが花のトンネルをつくる。

鉄ノ井（クロガネノ井）

三の鳥居より左に行き境内を過ぎると直ぐ左の角を曲ると其処にある。

鎌倉十井の一つ。江戸時代此の井戸から鉄の鏡音様が出たので此の名がある。今東京人形町にある、大観音寺にある鉄仏の首が其れと云う。

窟 不 動（イワヤブド）

鉄ノ井より寿福寺方面に向うと踏切の手前、右側の崖にある。

洞窟内に弘法大師作という石造の不動明王立像を安置する。洞窟前の道は、窟小路という古道である。

寿 福 寺

鎌倉五山の第三位。正治二年（一一二〇）北条政子が、榮西禪師の開山として建立。寺域はもと源義朝の館である。頼朝は始め此の地に館を構えようとしたが、狭いので大倉の地に幕府を設けた。

開山榮西は二度にわたり、宋の国に渡り、日本に始めて茶を持ち込んだ人物としても知られている。彼が実朝に茶の効用を説いた「喫茶養生記」は寺宝となつてゐる。 県重要文化財

喫茶養生記

寺 宝

地藏菩薩立像

重要文化財

釈迦如来座像

本 尊

榮西禪師座像

県重要文化財

仁 王 像

室町時代作

柏槩の古木

宋風庭

実 頼 政 子 の 墓

寿福寺仏殿裏山の墓地にある。共に安山岩製の美しい五輪塔である。墓地の奥まった処にあるやぐらで暗い口をあけてゐる。

政子の墓の少し右側のやぐらに安置されてゐるのが実朝の墓である。此のやぐらの内部には牡丹唐草の文様があり唐草やぐらと呼ばれる。

政子は、北条時政の娘として生れ、頼朝の妻となり、頼朝亡き後は、「尼將軍」として、子の頼家・実朝の後見役を果した。承久の乱には、御家人達の將兵に團結を呼かけて、男勝りの尼將軍の面目躍如とし、京に攻め入り、上皇軍を破り、執權北条の地位を不動なものとした。夫に先立たれ、子の頼家・実朝の非業の死を見とどけねばならなかつた政子が、女性として果して幸せてあつたかどうかは疑問だが、政治家として確かである。嘉祿元年（一二二五）六十九歳で此の世を去つた。

### 錢洗弁天

尚安養院と云う寺にも、政子の墓と云うものがある。北条政子が嘉祿元年に笹目に建てた長樂寺を、幕府滅亡後現在地に移し、政子の法名安養院改め、山号を抵園山とした。浄土宗。此の寺の境内に小さな塔に政子の墓と記したものが、刻字は後代のものである。

佐介トンネルを越して行くと右へ折れて間もなく坂を上つて行くと左側の崖にトンネルがある。此の暗いトンネルを潜り抜けると其処が、錢洗弁天である。

由来記によると、保元・平治の乱の頃、兵乱にて人々苦しむ事一方ならぬものがあつた。頼朝が鎌倉に幕府を開いてからも飢饉があつたりして民の苦しみは去らない。頼朝が其れを救お

うと日夜、神仏に祈願した処、文治元年（一一八五）巳の年巳の月巳の日の夜、一人の老翁が夢枕に現われて、「西北の谷に岩間から湧く神泉がある。其処は福神が隠れ住んで神仏の浄水を汲んで用うれば、人々は自づと信心を起し、悪鬼邪神も何時か退散し、天下は忽ち豊穡の榮えを見るであらう。我は隠れ里の主、宇賀福神なり」と告げて姿を消した。其処で頼朝は、此の泉を尋ね、宇賀福神を祀つた処、天下は忽ち平穩になつたと云う。

年移つて、正嘉元年（一二五七）執權北条時頼も頼朝の信心に倣つて巳年巳月の仲秋に此の泉で錢を洗つた。其処で人々も争つて錢を洗う様になり今日に至つていふ事である。

現在では此の水で錢を洗うと其れが福錢となり百倍千倍の力となり勤くといわれ、特に巳の日の縁日には福を求めて遠方より人々が集まると云う。

又、此の錢洗弁天入口のトンネルの上より、近年発見されたやぐらが、八十基程見付かつた石造の五輪塔や板碑などが発掘された。反対側の高みから其の全ぼうが見える。

鎌倉五山

第一位 巨福山 建長寺

第二位 瑞鹿山 円覚寺

第三位 龜谷山 寿福寺

第四位 金峰山 淨智寺

第五位 稻荷山 淨妙寺

鎌倉五名水

太刀洗の水 (梶原太刀洗) 朝比奈切通入口

日蓮乞水 名越坂入口

銭洗水 (せにあらい) 銭洗弁天社境内

不老水 (仙人池) 建長寺境内

金龍水 消滅す 建長寺門前

鎌倉十井

棟立ノ井 (破風ノ井) 覚園寺境内

瓶ノ井 (つるべ) 明月院境内

甘露ノ井 (くろがね) 淨智寺境内

鉄ノ井 (いづみ) 八幡宮西南の角

泉ノ井 (いづみ) 光明寺門前近く

扇ノ井 (いづみ) 扇ヶ谷個人庭園

底脱ノ井 (そこぬけ) 海蔵寺門前

星ノ井 (星月夜ノ井) 極楽寺坂入口

石ノ井 (鏡子ノ井) 長勝寺境内

六角ノ井 (矢ノ根井) 材本座と小坪の境

鎌倉七切通

極楽寺坂切通し

大仏坂切通し

化粧坂切通し

龜ヶ谷切通し

巨福呂坂切通し

朝比奈切通し

名越切通し